

氏名	スター タイラー デービット		
学位の種類	博士 (美術)		
学位記番号	博美第327号		
学位授与年月日	平成23年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉修復を試みるシリーズ 〈論文〉過去からの暗示ー秩序を作り出すためのとてつもない努力ー		
論文等審査委員			
(主査)	東京芸術大学	准教授 (美術学部)	三井田 盛一郎
(論文第1副査)	〃	教授 (〃)	佐藤 道信
(作品第1副査)	〃	〃 (〃)	東谷 武美
(副査)	〃	准教授 (〃)	O JUN

(論文内容の要旨)

人の手によって創られた全ての物において、思想とその思想の実際の実現の間にはギャップが生じる。このギャップは予期せぬ結果と矛盾した意図を含んだ多くの計画から生じていると考える。私は特に、政治、抗議運動、大規模な建設計画、戦争に興味を持っている。これらの領域は、世の中で誤っていると考えられる物事を直す「試み」(修復)に関する具体的な実例を含んでいるからである。しかし、努力がどんなに勇ましく大胆であっても、これらの試みの効果は必然的に不完全である。

計画とその結果の間に生じるギャップに対する解釈は、それを受け取る者に開かれており、政策立案者、記者、および歴史家を通して覆されることが多い。私自身もまた、アーティストとして出来事を解釈する過程に参加していると言える。私は、これから例として挙げていく人間の努力した末の不幸な結果を絶望的であるとみなすより、むしろそれらは、人が世の中を改善しようとする終わりなきプロセスであり、それによって励まされる行為だと考えている。結局、改善という行為は、再び手を加えられ修復される必要があるものである。

おそらく、この壊れたものを直すという行為への関心は、私がかつて救命救急隊員としてつとめた経験によって触発されたのだろう。救命救急隊員として、破損している人体を救い、ある意味修理のため病院へと搬送する事に携わった。人体は驚く程丈夫であるが、私たちは皆、誰もが最終的に衰弱することを承知している。この最後に壊れ、崩壊するという事実は、人類によって創られた物にも適用される。

私は作品を通して、巨大でモニュメント的な人工物の調査を行っている。作品の対象の範囲は、米軍基地、ダム、および政治集会のような、日本に住んでいる間に見たり、経験したことを含んでいる。そのなかで同時に、この現代の状況を導いた歴史的出来事などの情報を取り込み、現在が過去の上に成り立っていることを踏まえ、その複雑性についても目を向けている。ベトナム戦争が起きた1960年代は、そこから多くの現代社会の謎が築き上げられた起点に当たる。それはまた、デジタル時代への転換の時でもあった。現在では、ますます多くの新聞や印刷情報はオンライン化の道をたどっており、コミュニケーションと言葉について考える方法までもが劇的に変化を遂げている。

作品の題材に関しては、あえて詳細は伝えず、代わりに見る側の解釈に依存するという手段を選んでいる。ただし、作品を見る側が、対象に関して詳しい情報を少しでも知りたいという意思がある場合を想定し、作品制作のきっかけとなった歴史的対象をより明確に説明した小冊子を会場に呈示している。この展示方法を選択することで、作品に対する新たな見方が可能になることを願っている。また、私の作品は、印刷メディアの原点、すなわち、人間の日々の混乱した出来事の中になんらかの秩序をもたら

すという働きに基づいている。人が為した努力を形として表すため、紙面にはインクで記された例が多く残されているが、これらの例は、しばしば奇妙で魅惑的な場所として世間を見ているレポーター的な視点を利用している。特定の人の視点から物事の観測の説明をするとき、結局それは、その特定の人の偏見と関心を明らかにすることとなる。つまり、外国をレポートする記述を例にすると、この異国を説明する記述は、それを書いた作者の自画像でもあるということだ。私は、とてつもない人間の論議を呼ぶ試みを、私自身の解釈として一枚の紙の上に作品として表現するアイロニーと、その複雑さを認めている。

第一章では、版画を含む印刷物の権威と宗教への関わりや役割について述べた。印刷物は、世の中に秩序を与えるための重要な努力の一部である。しかし現在、それらが作り出してきた秩序が理想からかけ離れつつあり、啓蒙の時代から引き継がれてきた目標は、ことごとく打ち砕かれている。それらの打ち砕かれた断片は今、芸術家の制作する過程において必要不可欠な素材となっている。

第二章では、海外特派員のような好奇心と鋭い洞察力で、世の中の貴重な特徴を見つけ出す事の意義について考察した。同時にルポルタージュを自覚する事で、実は物語（歴史も含む）が、人間の特定の目的を念頭に構成されていることを理解することができる。また、美術鑑定家が職人の技を批判すると同時に評価するような物の見方をすることで、今まで人間が作り出してきたものの結果を理解し、同時に評価することが可能になる。

第三章では、皮肉なユーモアをツールとして用いることで、表面上は決して立ち入ってはいけない話題を転倒させることが可能になることを述べた。さらに社会の矛盾が皮肉によって明らかにされたとき、すべての人はある意味、限られた寿命と夢を持つものとして同じ船に乗っていることを知ることになる。

第四章では最後に、世の中を良くしようとする人間の終わりなき不幸な試みを理解するため、自分自身の経験を分析し、また自らの経験以外から得た情報を消化する努力の過程を考察した。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、過去の事件やでき事にテーマを取材し、アイロニーやユーモアを加えながらジャーナリスティックな視点からそれを描き出す、筆者の制作論理について論述したものである。

彼が扱うテーマは、政治や宗教、戦争、事件など重いものが多いが、作品ではそれが遠い視点から小さく描かれ、広い余白の中に人や集団、巨大な建造物がオモチャのように点在する。何より怒声や騒音がとび交うはずの光景から音が削除され、事の重大さとは裏腹の静寂と組み立てキットのオモチャのように状況が描かれる。この突き放した地点と、しかしそれを厳しく断じるのではなく、皮肉やユーモアをこめてなおそこに未来への希望を見る、筆者独特の視点の理由が、本論文で明らかになっている。

本論文のメインタイトルは「過去からの暗示」、サブタイトルが「秩序を作り出すためのとてつもない努力」とされている。彼は、歴史上のさまざまな出来事を、“世の中をよりよくするための試み”とし、しばしば徒労に終わる“とてつもない努力”もまたその一環なのだと捉える。ただ、実際に彼が作品化する米軍基地やダム、政治集会、デモなどは、安易な立場で判断できないシリアスな問題だ。それを、どちらかの側に立つのではなく遠い視点から客観的に描こうとする立場は、一見日和見とも捉えられかねない立ち位置の設定だが、本論文中に記された彼のこれまでの経験は、逆にそれゆえのスタンスであることを示している。

彼は現在の制作方法に重要な影響を与えた体験として、高校時代に報道で映像として見た湾岸戦争（1990～91年）と、彼がアメリカで最初の大学を卒業後に携わった救急救命隊員の仕事をあげている。彼にとってそれらは、“壊れたもの（国家、人体）を修復”する作業としての意味をもち、それがのちに結果の如何にかかわらず“世の中を良くするための飽くなき改善の努力”として状況を描く、制作のコンセプトにつながっていく。そしてもう一点、制作方法へとつながったのが、ジャーナリスティックな

報道、伝達というスタンスである。一方の側ではない中立の立場で描こうとする筆者の制作スタンスは、あるいは強大な力を世界で行使するアメリカに生まれた筆者ゆえのものなのかもしれない。本論文が、古今東西の様々な歴史的でき事を、深める方向よりコンパクトに次々にまとめていく方針をとっているのも、ジャーナリスティックな“編集”の作業を思わせる。そしてそうした編集とそれによる印刷物こそが、混沌とした様々な試みに“秩序”を与えるものだと筆者が考えていることが明らかにされている。

一見、実態感が希薄なように見える彼の作品は、現在の高度情報社会の属性を表したもののようにも見えるが、本論文と博士展に彼が作品とともに出品した編集小冊子からも、それがシリアスな現実認識ゆえに彼が選択した逆の方法であることがわかる。同時に、彼が来日して外部者として見た日本の風物、事物は画面に大きく描かれるように、論文と作品にはともに彼のウィットとユーモア、優しい人柄があふれている。博士論文にふさわしいユニークな論考として、審査員一同の評価と共感を得た。

(作品審査結果の要旨)

スター・タイラーは、アメリカで浮世絵版画に出会い、日本の伝統的水性木版画に興味を持つ。いつか日本で版画を学びたいとの夢を持ち続けた。長い幾多の旅を経て日本にたどり着き、東京芸術大学版画研究室で本格的に木版画研究に励むことになった。

「世の中を良くする試みシリーズ」に於いて日本の伝統的水性木版画制作を試みる。タイラー自身が生活している下町周辺で発見した物事をもとに制作したものだ。選挙活動をしていた立候補者が引いて来た自転車を題材としたもので、拡声器を取り付けた滑稽なものや、神社の崩れかけた猿の石像を保護するための緑色のワイヤーネットを無造作にかぶせた光景に触発されて制作したものは、努力に報われず主要な対象物を隠してしまうという矛盾を描き出している。小さい英雄的行為が実現されたときに起こる、予期せぬ結果に興味を持ち、人間世界を良くしようと望む、より大きな試みのいらだたしい過程に見られる小さな具体例を版画作品にしたものである。これらの作品は、表情のないユーモアを、アイロニーの形を使って描写している。日本人には、あまりにも見慣れてしまっている事物や風景をアメリカ人というよりもタイラー個人の特別な目線で見たとであり、静かに語られる画面は、あたたかい人間性が伝わり大変心地よい作品と成っている。

修了作品は、この様な目線を拡大してより社会的な大きなテーマにしたものに取り組んでいる。埼玉大学共生社会研究センターの「ベ平連」に関する文献に影響を受けて、反ベトナム戦争運動と反米軍基地に焦点をおき、また反ダム運動の抗議運動のあいだに存在する様々な類似点について考えて制作している。

作品は、木版で和紙に刷られた上に鉛筆と手彩が加わり雁皮紙が張り込んである。全体の色調は淡い美しさを持ちあくまでも静かに語る姿勢は変わらなく、大和絵を思わせる格調高い画面になっている。

テーマ自体は大変重いものではあるが、それを声高に伝えるのではなく、ゆっくりと解きあかすように、アイロニーとユーモアとヒューマニズムを持って表現され、作品の完成度は高く評価された。

(総合審査結果の要旨)

博士後期課程での作品・論文に向かう思考、思索の過程はスター・タイラーのアメリカ人としての自国およびいくつかの国での滞在と日本での経験を拾い集め組み立て直すような過程であった。論文要旨に語られる「人の手によって創られた全ての物において、思想とその思想の実際の実現の間にはギャップが生じる。このギャップは予期せぬ結果と矛盾した意図を含んだ多くの計画から生じていると考える。私は特に、政治、抗議運動、大規模な建設計画、戦争に興味を持っている。これらの領域は、世の中で誤っていると考えられる物事を直す「試み」(修復)に関する具体的な実例を含んでいるからである。し

かし、努力がどんなに勇ましく大胆であっても、これらの試みの効果は必然的に不完全である。」というように、アイロニーとユーモアを基軸とした制作と研究への働きかけは、恐らく事実としてあったであろう事柄、事件から、まさにとてつもない努力をもって修復を試み、ある種の深刻さ、悲惨さ、政治性、周知の歴史性を取り去ってしまうような表現様式を作り出した。

作品における一つの方法としては、彼のアメリカ時代の作品にあるような複雑な作画法から離れて、独自に解釈された日本的な画面、構図、空間が開発された。画面を作る要素としての「間」や淡い色調は、主題として扱われる事件や出来事の臨場感を空虚とも言える場面へと変換してしまった。これが彼の言う修復の結果であった。

論文は作品での「修復を試みる」ことの過程を様々な主題を収集しながら、ジャーナリスティックな技法も使いながら論証していったものであった。ここにも彼が拾い集めて来た経験の断片の数々を見ることができる。キーワードとなる“報道で映像として見た湾岸戦争（1990～91年）”“大学卒業後に携わった救急救命隊員の仕事”“自費出版した雑誌（自作のたくさんのグラフィカルなイメージの入った）”“父親の航空機エンジニアという仕事（修理を要するエンジンや幾多の図面の記憶）”はそれぞれが作品の主題や手法に関わるものであった。修理を要するものは機械のような機器に留まらず、人体、事件、歴史にまで及ぶというアイデアをこのような経験や記憶から探り出すという思考過程を描出した。

作品、論文とも題目にあるような、「過去からの暗示」から「秩序を作り出すため」の「修復」作業とそこに至るプロセスを読ませるものであったと言える。しかし、ここで特筆すべきは、この“とてつもない努力”が作画され表現されたとき、脱脂され軽やかなものへと修復されることである。このことは一方、作品本質的部分での強度の問題は指摘しておく必要はあるが、むしろ軽味を表現の核心として評価した。

以上のことを鑑み、この思考および制作過程のユニークさは審査員一同の評価を得たものであり、スター・タイラーの博士作品・論文が総合としてそれぞれを補完し合い博士号を取得するにふさわしいものと認めるに至った。